

## はじめに

東北歴史博物館は、宮城県を中心にしながら、東北地方の歴史・文化に関わる資料の収集と保存、研究に努めています。また、その成果を広く世界に発信することにより、社会との交流を促進し、国際化時代にふさわしい地域づくりと地域活性化に貢献することを使命としています。

本紀要は、そうした使命のもと、当館職員の地道な研究活動の一端を公にするものです。今回は博物館学から論文1編、考古学から論文1編・報告1編、そして保存科学から報告3編を収録します。いずれの報告・論文も、東日本大震災から9年目を迎え、その後の復興の歩みの中で一人一人の学芸員が日々の実践の中で思索を重ね、東北の再構築へ向け、さらに次の世代へとその成果を手渡していく営みの記録ともなっています。

鷹野は、東日本を主に56ヶ所の遺跡博物館を通して、遺跡保存の先にあるもの、活用とは何かを問いかけています。遺跡博物館の特質として地域の人が大勢集まる空間を持っており、遺跡を地域に貢献させる力量を地域が持つことの重要性と博物館の役割について考察しています。

相原と野口真利江氏（株パレオ・ラボ）・谷口宏充氏（東北大名誉教授）・千葉達朗氏（アジア航測㈱）は多賀城市山王遺跡東西大路南側溝および山元町熊の作遺跡における貞観津波堆積層の構造と珪藻分析について論じています。これまで肉眼では判別が難しかった津波堆積層を、土層の剥ぎ取りによってその構造を立体的に可視化し、津波特有の水成堆積を明らかにします。珪藻分析では、多くの淡水種に僅かの海水種・汽水種が混じる様相を捉え、両遺跡の比較検討から完形殻の破損率と津波の挙動について論じています。

また、相原と谷口宏充氏（東北大名誉教授）・千葉達朗氏（アジア航測㈱）は東日本大震災でとりまとめを延期していた城柵官衙関連遺跡の外郭・防壁線に関する考古分野の踏査について報告します。石巻市桃生城跡・涌谷町日向館跡とその周辺について、宮城県内では震災遺構の調査で実績がある航空レーザー測量技術に基づく赤色立体地図を用い、樹木を伐採せずに表層地形だけを可視化する手法を取り入れています。

及川らは水損資料から生じる揮発成分について継続して調査しており、今回は新たに津波被災後長期間保管されていた紙資料や洪水被災紙資料について揮発成分調査を行っています。それらの結果をもとに災害の種類や乾燥などの処置の違いによる資料揮発成分の差異について考察しています。

芳賀らは文化財収蔵を目的としていない空間における資料収蔵のための環境改善の試みとして、木材設置による湿度環境改善を行った基礎調査の結果を報告しています。

森谷らは東日本大震災において被災し、その痕跡をとどめた資料を「被災物」とし、震災伝承などへの活用を考慮し、その保存活用について、被災物を収集・保管・展示をしている施設等のヒアリング調査結果を実施し、その結果を報告しています。

職員一同、今後とも新たな一歩を刻むよう一層の研鑽を重ねる所存ですので、変わらぬ御指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成31年3月25日

東北歴史博物館長 鷹野光行